
はしがき

720年(養老4)に撰進された『日本書紀』はその翌年に最初の講書が行われ、10世紀後半の康保まで都合7回の講書が行われた。講書の担い手は文章道出身の学者・知識人であり、講書の参加者は大臣以下の高級貴族だった。『日本書紀』は勅撰史書の嚆矢であるが、序文が付されていないこと、神代巻を含むこと、系図1巻が付されていたこと、純粋な正格漢文で書かれていること、漢音に基づく万葉仮名が用いられていることなど、『続日本紀』以下の国史と異なる点が多い。講書が行われ、本文を和語によって読み下す努力が続けられたこともまた他の史書と大きく異なる。日本紀講書の中心となったのはこの訓読作業であり、訓読された和語は『日本紀私記』として成書化され、講書の関係者はおよそ30年に1度行われる次の講書に備えたのである。

第2回目の講書である弘仁の講書の記録である『弘仁私記』は長文の漢文による序が存在しており、講書が行われた事情を詳しく記している。その中に「以丹点明軽重」という記述があり、そこから万葉仮名表記の和訓に朱声点を注記したと読み取ることができる。現存する声点は9世紀末が最古のものであるが、この記述から日本における声点の使用は9世紀前半に遡るということになる。この声点付和訓は代々の講書で万葉仮名の字面にいたるまで正確に受け継がれた。前回の和訓を改めたときは「弘仁説〜」「師説〜」のように記して新訓と古訓を併記して、古い訓を保存することに努めている。そのようにして長く保存された『日本書紀』の和訓は源順撰『和名類聚抄』に取り込まれることになった。また『類聚名義抄』は『和名類聚抄』から多くの和訓を取り込んだので、結果として日本紀講書の成果としての

『日本書紀』古訓は多くの古辞書に受け継がれることとなった。その中には養老の講書時の和訓も含まれている。

康保の講書を最後に日本紀講書は行われなくなったが、そのころ岩崎本『日本書紀』や前田本『日本書紀』のように多くの訓点(ヲコト点・返り点・声点・区切り点・片仮名表記の和訓など)を記入した写本が作成されるようになった。ひとたび講書の成果をすべて取り込んだこれらの写本が作られると、数年に及ぶ講書は行われなくなり、『日本書紀』に関わる学問は衰退したと考えられる。その後起こった卜部家による神代巻を中心とした研究などは、講書が行われていた時代の研究水準とは比較ならず、もはや過去の研究成果を正確に受け継ぐことすら困難となった。現存する『日本書紀』声点本は、『日本書紀』本文を訓読するには便利であるが、和訓とそこに注記されている声点の意味を十分に理解しない者によって作られ、受け継がれてきたものであることに注意しなくてはならない。

本書の第1の目的は『日本書紀』古写本に注記された声点について、アクセント資料としての性質を明らかにし、アクセント史研究上に正しく位置づけることである。第2の目的は『日本書紀』声点本の成立過程を明らかにすることである。第3の目的はそれらの研究成果に基づいて古代アクセントの歴史的研究を深化させることである。現存する『日本書紀』声点本と『日本紀私記』などの関連資料は他の文献に比して多様かつ膨大であり、声点から直接アクセント体系を再構築することは困難である。よって第3の研究目的を達するためには第2の研究目的が必要不可欠であると認識し、文献学・歴史学・文学研究の成果をも採り入れることにより、本書の中心に据えることにした。このような事情で本書の題目を「日本書紀声点本の研究」とした。

日本語アクセントの歴史的研究、とくに文献資料による古代アクセントの研究は金田一春彦氏により観智院本『類聚名義抄』を中心資料として進められた。京都アクセントは南北朝時代(室町時代初期)に大きな体系変化を起こし、古代アクセントの時代は終焉を迎える。金田一春彦(1955)は平安時代末期から鎌倉時代のア

クセントを「古代アクセント」、体系変化後の室町から江戸初期のアクセントを「中世アクセント」、江戸時代後期～現代のアクセントを「近代アクセント」と位置づけた。その後図書寮本『類聚名義抄』が世に出て小松英雄氏により「平声軽点」が発見され、さらに研究が進展しより多くのアクセント型をもつアクセント体系として平安時代末期の京都アクセント体系が再構築された。金田一春彦(1960b)は小松英雄、馬淵和夫両氏の研究成果を受けて金田一春彦(1955)を改訂したものである。その後も古代アクセントに関する研究は金田一春彦氏、築島裕氏、秋永一枝氏、桜井茂治氏、馬淵和夫氏、望月郁子氏、奥村三雄氏らによってさらに進展した。しかし『日本書紀』声点本は古代アクセントの資料として存在は知られていたものの、その資料的性格が明らかでない点が多いことなどから、これまでのアクセント史研究で十分に利用されてきたとはいいがたい(金田一春彦(1960b)では「やや不精密ではあるが」として『世尊寺本字鏡』『観智院本類聚名義抄』『高山寺本類聚名義抄』などとともに平安末期の資料に加えられている)。『日本書紀』古写本に注記されている声点は量において十分な価値を持つが、その質の面についてまだ十分な検証がなされてこなかったといえよう。

本書第Ⅰ部全10章の研究目的はアクセント資料としての『日本書紀』声点本の資料価値を見きわめることにある。研究対象となる資料は『日本書紀』古写本の中から選定した、資料価値が高いと認められる14文献(神代巻7文献、人皇巻7文献 図書寮本は神代・人皇を各1文献として取り扱う)と『日本紀私記』甲本・乙本・丙本および乾元本『日本書紀』所引日本紀私記の逸文、関連資料として『古語拾遺』古写本2文献に注記されたすべての声点である。第Ⅱ部全6章は日本紀講書と『日本紀私記』の研究を通じ、『日本書紀』声点本の成立過程を明らかにすることを目的とする。特に「公望私記」の和訓がどのように『和名類聚抄』・『類聚名義抄』に受け継がれたかについて詳しく考察する。第Ⅲ部全7章は京都アクセントの歴史のうち、古代アクセント(平安・鎌倉時代)に関する問題について考察する。弁別的特徴「押さえ」と「下げ核」によって平安時代アクセント体系を再構築し、アクセント体系大

変化の理由を明らかにする。また第Ⅰ部と第Ⅱ部によって得られた知見をもとに、平安時代の代表的なアクセント資料(『金光明最勝王経音義』・図書寮本『類聚名義抄』)に関する通説の見直しを行った。第Ⅲ部にはいろは歌に関する考察も含めたが、それは師弟関係にある源順・源為憲の二人も「日本紀学」の流れを受け継いでいたと考えたからである。

2020年は『日本書紀』撰進1300年に当たる。『日本書紀』に関わった古代の学者たちに畏敬の念を覚えるとともに、「日本紀学」に関わる数多くの資料が現代まで残されたことに感謝する。

2020年3月

鈴木 豊

凡 例

本書で用いる術語と資料について以下に簡潔に説明する。

1. 日本語のアクセント

1.1 アクセント

個々の語句について定まっている音の高低(ピッチ)の配置。『日本書紀』声点本が表示するアクセントについては3.アクセント表示を参照していただきたい。

1.2 アクセント型

一つの共時態に実際に存在する高低(ピッチ)配置の型。アクセント型の種類は方言や時代によって異なる。

1.3 アクセント体系

一つの言語体系で互いに他と区別されて存在する一定数のアクセント型の組織的集合。

1.4 アクセント語類

方言アクセント相互にはアクセント型に所属する語の対応が見られる。それらのアクセントによって区別される語のグループをアクセント語類(金田一語類)と呼ぶ。金田一春彦(1974)で示された類別語彙表に基づく。金田一語類を主に文献(アクセント史資料)から補訂した語類を早稲田語類と呼ぶ。秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編(1997)『日本語アクセント史総合資料 研究篇』で示された類別語彙表に基づく。

2. アクセント史

2.1 日本語アクセント史(国語アクセント史)

本書が対象とするのは主として平安時代から鎌倉時代の京都方言アクセントである。この時代京都は日本の都であり、文献に残された日本語はこの京都方言である。よって古代日本語アクセントのは実質的には古代京都方言アクセントということになる。

2.2 古代アクセント

金田一春彦(1955)は日本語アクセント史を、平安時代末期から鎌倉時代のアクセントを表す「古代アクセント」、体系変化後の室町から江戸初期のアクセントを表す「中世アクセント」、江戸時代後期～現代のアクセントを表す「近代アクセント」の三つの時代に分類した。本書では「古代アクセント」を平安・鎌倉時代のアクセントの意味で用いる。

3. アクセント表示

拍のピッチをHLRF (High・Low・Rising・Falling＝高平・低平・上昇・下降)で表す。先行研究では(●・○・◐・◑)の記号が用いられていることもある。

『日本書紀』声点本をはじめとする声点資料ではアクセントを表示する記号として「声点」が用いられている。本書では以下の3種類のアクセント表示を用いる。

資料の表示レベル…声点(平上去入東徳)

音声表示レベル…拍のピッチ(LHRF)

音韻表示レベル…(弁別的特徴「押さえ」と「下げ核」) ※第Ⅲ部第5章・第6章参照。

4. 声点によるアクセント表示

4.1 声点

本来は中国語の声調(四声)を表すための記号(星点＝点発、圏点＝圏発、線点などがある)だが、平安時代には日本語のアクセントを表すのにも用いられるようになった。声点は文字の四隅の4箇所または四隅と文字の左側中間やや下位置、文字の右側やや下位置の6箇所に注記される(「差す」「打つ」とも)。6箇所に注記されるのは漢音の声調体系で「六声体系」、4箇所に注記されるのは呉音の声調体系で「四声体系」と呼ばれる。声点は六声体系の場合文字の左隅から右回りに平声点・東(声)点・上声点・去声点・徳(声)点・入声点、四声体系の場合は同様に平声点・上声点・去声点・入声点と呼ばれる。「東」は平声軽(ひょうしょうのかる)、「徳」は入声軽(にっしょうのかる)が本来の呼称である。「東」は平声軽の、「徳」は入声軽の韻書での代表的な字を以て示したものである。六声体系の場合、平声軽に対して「平」を平声重(ひょうしょうのじゅう)、「入」を入声重(にっしょうのじゅう)と呼ぶ。

4.2 調値

六声体系では平声点は低平調(L)、東(声)点は下降調(F)、上声点は高平調(H)、去声点は

上昇調(R)、徳(声)点は韻尾に -p-t-k をもつ高平調、入声点は韻尾に -p-t-k をもつ低平調である。四声体系では平声点は低平調、上声点は高平調、去声点は上昇調、入声点は韻尾に -p-t-k をもつ低平調である。和語のアクセントを表す場合の調値も字音声調と同じであるが、徳(声)点・入声点是用いられない。

4.3 差声方式

漢音の声調を表す六声体系と呉音の声調を表す四声体系とがある(図1を参照)。和語のアクセントを表す声点はこれを応用したものだが、おおむね、平安時代の資料は六声体系、鎌倉時代以降の資料は四声体系の差声方式によっている。「六声体系A」「六声体系B」は仮称。諸事情により差声方式が不明の資料も多い。

六声体系A…岩崎本『日本書紀』・『金光明最勝王経音義』・半井本『医心方』など

六声体系B…図書寮本『類聚名義抄』

四声体系……鎌倉時代以降の声点資料

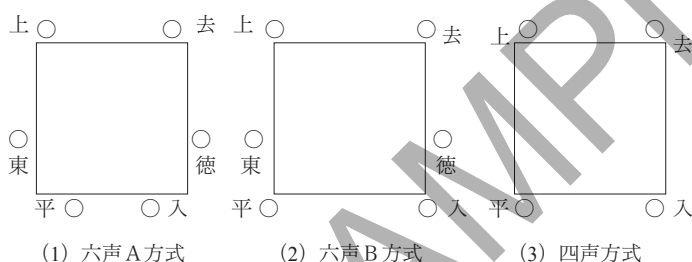


図1 六声体系と四声体系の差声方式

4.4 声点の注記位置認定

声点の注記位置は差声方式が明らかになってはじめて決定される。移点の際に生じたであろう注記位置のズレや後世のアクセントの混入などもあり、声点注記位置の認定は慎重に決定されなくてはならない。

5. 資料

5.1 用例の引用

本書で示す『日本書紀』声点本の用例の引用は以下の索引による。

『古語拾遺声点付語彙索引 乾元本日本書紀所引日本紀私記声点付語彙索引』1986年2月
アクセント史資料索引第4号 アクセント史資料研究会

『日本書紀神代卷諸本声点付語彙索引』1988年3月 アクセント史資料索引第7号

『日本書紀人皇卷諸本声点付語彙索引』2003年3月 アクセント史資料索引第19号

『日本紀私記』甲本・丙本については声点付き語彙索引(未刊)を利用した。『日本書紀』声点本以外のアクセント資料の引用は以下による。

秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊編(1997)『日本語アクセント史総合資料索引篇』

5.2 『日本書紀』声点本残存巻一覧

『日本書紀』古写本のうち、声点注記のある文献を『日本書紀』声点本と呼ぶ。本書では声点の注記位置が明瞭な以下の諸本(14文献 図書寮本は神代・人皇を各1文献として取り扱う)を研究対象とする。各文献の残存巻と声点注記の有無を次頁表1に示す。

5.3 出典資料

本書の対象となる『日本書紀』声点本は神代巻7文献、人皇巻7文献の合計14文献(図書寮本は神代・人皇を各1文献として取り扱う)である。声点はまず依拠文献(複製・写真)により調査を終え、後に原本の閲覧が許されれば、原本と声点の照合をおこなった。以下に出典資料の概略(書写年代、書写者、所蔵者)と、声点の調査の際に依拠した写真・複製を【依拠文献】、参考にした翻刻等を【参考文献】として記した。原本を閲覧したものはその年月を記した。

【神代巻】

- 鴨脚本(嘉禎本) …嘉禎2(1236)年写。国学院大学附属図書館蔵。【依拠文献】古典保存会発行の複製(1941年7月)。1983年10月原本を閲覧して声点を照合した。
- 弘安本…ト部兼方写。巻第二に「弘安九年春比重加裏書了」の奥書あり。文化庁蔵。【依拠文献】赤松俊秀編『国宝ト部兼方自筆日本書紀神代巻』(1971年2月 法蔵館)。1987年8月、秋永一枝氏の原本閲覧の際、坂本清恵氏と共に同行し、声点を照合した。
- 乾元本…乾元二(1303)年、ト部兼夏写。天理図書館蔵。【依拠文献】天理図書館善本叢書一『古代史籍集』(1972年7月 八木書店)。1983年7月原本により声点を照合。
- 図書寮本…南北朝頃写。宮内庁書陵部蔵。【依拠文献】「秘籍大観日本書紀」(1926年6月 大阪毎日新聞社)および書陵部撮影の写真。林勉氏の朱入れ複製本により声点を照合。
- 嘉暦本…嘉暦3(1328)年、曇春写。彰考館蔵。【依拠文献】日本文献学会叢刊之一(1944年7月 日本文献学会)。林勉氏の朱入れ複製本により声点を照合、1988年3月原本を閲覧し声点を照合した。

表1 『日本書紀』声点本残存巻一覧

凡例:○本文のみ ●声点あり

巻本	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
鴨脚		●																													
弘安	●	●																													
乾元	●	●																													
嘉暦	●	●																													
明德	●	●																													
丹鶴	●	○																													
岩崎																							●		●						
前田											●			●			●				●										
図書		●								○		●	●	●	●	●	●					●	●	●	●						
北野	○		●	○	○	●	○	○	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○	○	○	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●	
熱田	○	○	●	●	●	○	○	●	●	●	●	●	●	●	●																
兼右			●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
内閣	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

※内閣文庫本神代巻(巻一・巻二)は乾元本の写しであるため本書の対象資料から除外した。

○明德本…明德二(1391)年写。阪本龍門文庫蔵。1987年7月原本により声点を調査。

○丹鶴本…嘉元4(1306)年、神祇伯家本の写本の模刻。【依拠文献】丹鶴叢書複製(国書刊行会 1912年5月)により声点を調査。

【人皇巻】

○岩崎本……巻22・24の2巻が現存する。平安中期末写。文化庁(京都国立博物館)蔵。岩崎家、東洋文庫旧蔵。【依拠文献】『東洋文庫蔵 日本書紀 卷第二十二推古紀』(1972年4月 日本古文学刊行会)、『東洋文庫蔵 日本書紀 卷第二十四皇極紀』(1972年4月 日本古典文学刊行会)【参考文献】築島裕・石塚晴通『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀——本文と索引——』(1978年11月 日本古典文学会)。1987年8月東京国立博物館において原本を閲覧し、声点の照合を行った。

○前田本……巻11・14・17・20の4巻が現存する。平安後期写。前田育徳会尊経閣文庫蔵。【依拠文献】『秘籍大観日本書紀』(1926年5月～12月 大阪毎日新聞社)、前田育徳会尊経閣文庫編『日本書紀』(尊経閣善本影印集成26 2002年 八木書店)【参考文献】石塚晴通「前田本日本書紀院政期点(本文篇)」(『北海道大学文学部紀要』25-2 1977年12月)「同(本文篇補)」(『同』26-1 1977年12月)「同(研究篇)」(『同』26-2 1978年3月)

○図書寮本……巻2・10・12～17・21～24の12巻(7冊)が現存する。ただし巻10は声点注記がない。院政期写(巻2を除く)。宮内庁書陵部蔵。【依拠文献】宮内庁書陵部撮影の写真および以下の複製による。『秘籍大観日本書紀』(1926年6月～12月 大阪毎日新聞社)なお、林勉氏より、氏が原本調査によって訓点を照合した複製を拝借する機会を得た。

【参考文献】石塚晴通『図書寮本日本書紀 本文篇』(1980年3月 美季出版社)『同 索引

篇』(1981年2月 美季出版社)『同 研究篇』(1984年2月 汲古書院)。巻12・13・21・22については宮内庁書陵部において原本を閲覧し、声点の照合を行った。

○北野本……巻3～13・15～30の28巻(28冊)が現存する。ただし巻1・4・5・7・8・15～21は声点注記がない。残存巻は第一類～第五類に分類される。第一類(巻22～27)は院政時代写。第二類(巻28～30)は鎌倉時代写。第三類(巻4・5・7～10・12・13・15・17～21)は吉野時代写。第四類(巻3・6・11)は室町時代写。第五類(巻16)は江戸時代写。北野神社蔵。【依拠文献】『国宝北野本日本書紀』(1941年4月～12月 貴重図書複製会)。1983年9月北野神社において原本を閲覧し、声点の照合を行った。

○熱田本……巻1～10・12～15の14巻が現存する。ただし巻1・2・6・7は声点注記がない。永和元(1375)～三(1377)年、巖阿写。熱田神宮蔵。【依拠文献】熱田神宮撮影の写真による。

○兼右本……巻3～30の28巻(28冊)が現存する。天文9(1540)年、吉田兼右写。天理大学附属図書館蔵。【依拠文献】『日本書紀 兼右本一』『同 二』『同 三』(天理図書館善本叢書54・55・56 1983年5月・7月・9月 八木書店)。1997年1月天理大学附属図書館において原本を閲覧し、声点の照合を行った。

○内閣文庫本……巻1～30の30巻(10冊)が現存する。慶長頃写。国立公文書館蔵。【依拠文献】国立公文書館撮影の写真による。1987年4月～6月にかけて国立公文書館において原本を閲覧し、声点の照合を行った。

5.4 諸本の声点の朱墨と形態

『日本書紀』声点本諸本に注記された声点の朱・墨と形態はさまざまであるが、注記箇所(本文の万葉仮名・訓読漢字・音読漢字、傍訓の片仮名)によって使い分けられている文献が多い。表2は神代巻諸本の、表3は人皇巻諸本の声点の朱墨と形態の区別(使い分け)を示したものである。

表2 神代巻諸本の声点の朱墨と形態

本	注記部分	万葉仮名	訓読漢字	音読漢字	傍訓片仮名
鴨脚本		朱・星	なし	なし	朱・星
弘安本		朱・線	朱・圏	墨・圏	朱・線
乾元本		朱・圏	朱・圏	墨・圏	朱・線
図書寮本		墨・線	墨・圏	墨・圏	墨・線
嘉暦本		朱・線	朱・圏	墨・圏	朱・線
明德本		朱・線	墨・圏	墨・圏	朱・線
丹鶴本		朱・圏	朱・圏	墨・圏	朱・星

表3 人皇巻諸本の声点の朱墨と形態

本	注記部分	万葉仮名	訓読漢字	音読漢字	傍訓片仮名
岩崎本		朱・圈	朱・圈	朱・圈	墨・星
前田本		朱・星	墨・圈	墨・圈	墨・ゴマ
図書寮本		朱・圈	墨・圈	墨・圈	墨・星
北野本一・二類		朱・圈星	朱・圈星	なし	なし
同 四類		朱・線	朱・圈	朱墨・圈	朱・線星
熱田本		朱・線	朱・圈	なし	朱・線星
兼右本		朱・線	墨・圈	墨・圈	朱・線
内閣文庫本		朱・線	朱墨・圈	墨・圈	朱・線

5.5 使用した複製類

上記『日本書紀』声点本以外の文献について、依拠した複製資料・参考文献を発行年順に示す。

資料(1926)『本草和名上巻』『同下巻』(日本古典全集刊行会)

資料(1926)『古語拾遺』[元弘本] …… [尊経閣叢刊一](1926年6月 前田育徳財団)

資料(1932)『御巫本日本書紀私記』の声点は古典保存会の複製(1932年8月)による。

資料(1932)『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』(国史大系8 1932年2月 吉川弘文館)

資料(1932)新訂増補国史大系第八巻『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』(1932年2月 吉川弘文館)

資料(1932)丙本日本紀私記 …… 『日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史』(〔新訂増補国史大系第八巻〕1932年2月 吉川弘文館)

資料(1933)御巫本私記 …… 『日本書紀私記応永本』(1933年 古典保存会)

資料(1962)補忘記 …… 『元禄版 補忘記』(1962年5月 白帝社) 『貞享版 補忘記』(1962年9月 白帝社)

資料(1972)『古語拾遺』[嘉禄本][暦仁本] …… 『古代史籍集』(天理図書館善本叢書1 1972年7月 八木書店)

資料(1973)『契沖全集 第十巻 語学』(1973年10月 岩波書店)

資料(1976)観智院本『類聚名義抄』 …… 『類聚名義抄 観智院本 仏』『同法』『同 僧』(〔天理図書館善本叢書32~34 1976年6~11月 八木書店〕)

資料(1976)図書寮本名義抄 …… 『図書寮本類聚名義抄 本文篇』(1976年11月 勉誠社)

資料(1976)陽明叢書14『中世国語資料』(思文閣出版)

資料(1982)『玉篇全』(台湾中華書局 中華民國71年10月 第4版)

資料(1982)『古事記 日本書紀(下)』(神宮古典籍影印叢刊2 1982年4月 八木書店)

資料(1982)御巫本日本書記私記 …… 『古事記 日本書紀(下)』(〔神宮古典籍影印叢刊二〕1982年4月 八木書店)

資料(1983)兼右本紀……『日本書紀兼右本一』『同二』『同三』(天理図書館善本叢書54・55・56 1983年5・7・9月 八木書店)

資料(1986)鎮国守国神社本名義抄……『鎮国守国神社蔵本 三宝類聚名義抄』(1986年1月 勉誠社)

資料(1991)『医心方一仁和寺本影写本・多紀家旧蔵本』(オリエント出版社)

資料(1991)『医心方一半井家本(1)』(オリエント出版社)

資料(2015)『日本書紀 乾元本一』(新天理図書館善本叢書第2巻 八木書店)

資料(2015)『日本書紀 乾元本二』(新天理図書館善本叢書第3巻 八木書店)

資料(2015)『古語拾遺 嘉禄本・暦仁本』(新天理図書館善本叢書第4巻 八木書店)

SAMPLE

目 次

はしがき	(1)
凡 例	(5)
序 論	1
1 はじめに	1
2 アクセント史研究における古代アクセント	2
2.1 アクセント史研究史	2
2.2 古代アクセント研究の資料	3
3 『日本書紀』声点本研究史	5
4 『日本書紀』声点本の資料的性格	12
4.1 現存『日本書紀』声点本	12
4.2 声点の異同に関する考察	14
5 おわりに	17
第 I 部 『日本書紀』声点本の資料価値に関する研究	
はしがき	21
第 1 章 『日本書紀』神代巻の声点	25
1 はじめに	25
2 声点の概要	26
3 声点注記箇所の異同	28
4 声点の加点時期	30
5 おわりに	33
第 2 章 乾元本紀所引『日本紀私記』の声点について	37
1 はじめに	37
2 アクセント体系	37
3 差声方式	39
4 資料の均質性の検討	41
5 アクセントに問題のある語	42
6 おわりに	43
第 3 章 乾元本『日本書紀』万葉仮名訓の声点	49
1 はじめに	49

2	研究史	50
3	「弘仁」「安氏説」等の注記	53
3.1	「弘仁説」等の注記	54
3.2	「安氏説」等の注記	56
3.3	承和講書の参加者	56
4	声点注記位置の相違	57
4.1	「此声弘仁説」	57
4.2	片仮名訓声点との相違	58
4.3	声点付和訓の引用と改変	61
5	おわりに	63
第4章 岩崎本『日本書紀』の声点		65
1	はじめに	65
2	声点注記箇所分類と問題例の検討	66
2.1	声点注記箇所分類	66
2.2	a万葉仮名	67
2.3	b漢字	68
2.4	c傍訓の片仮名	75
2.5	d傍訓の万葉仮名	75
3	問題点のまとめ	75
3.1	声点注記箇所	75
3.2	差声方式	76
3.3	下降拍の消滅	76
3.4	日本紀講書から訓点本へ	76
3.5	岩崎本の価値	78
4	おわりに	79
第5章 訓読漢字の声点のアクセント表示法		80
1	はじめに	80
2	差声方式について	81
3	訓読漢字の声点によるアクセント表示	82
3.1	差声時期	82
3.2	平声点および上声点	82
3.3	去声点	84
3.4	平声軽点	85
3.5	1字2声点	87
3.6	入声点	89
4	アクセント表示方法とアクセント観	89

5 おわりに	91
第6章 『日本書紀』被訓注字の声点	94
1 はじめに	94
2 資料	95
3 考察	108
3.1 諸本間の異同	108
3.2 韻書の四声と合致しない声点注記	109
3.3 差声方式	110
3.4 声点の注記時期	111
3.5 岩崎本の価値・重要性	111
3.6 漢風諡号の声点	111
4 おわりに	113
第7章 『古語拾遺』の声点	115
1 はじめに	115
2 『古語拾遺』の声点本について	115
3 声点の注記されている語	116
4 声点の性格	117
4.1 伊勢本	117
4.2 嘉禄本	118
4.3 暦仁本	120
4.4 字音語の声点	121
5 差声時期	122
5.1 アクセント体系	122
5.2 差声目的	123
5.3 外部徴証	123
5.4 その他	124
6 おわりに	125
第8章 『日本書紀』声点本の濁音表示	128
1 はじめに	128
2 書紀声点本について	129
3 濁音表示例の数量的考察	129
4 濁音表示例の検討	132
5 初期声点資料における濁音表示	134
6 おわりに	137

第9章 『古語拾遺』声点本の濁音表示	139
1 はじめに	139
2 アクセント史資料としての暦仁本『古語拾遺』	140
3 濁音の卓立表示	140
4 濁音表示資料としての暦仁本『古語拾遺』の位置	146
5 声点から濁点へ	148
6 訓点資料における濁音表示の意義	150
7 おわりに	151
第10章 『日本書紀』 α 群の万葉仮名	152
— 原音声調と日本語アクセントとの対応 —	

第II部 『日本書紀』声点本の成立過程に関する研究

はしがき	173
------	-----

第1章 『弘仁私記』序の「以丹点明軽重」	177
1 はじめに	177
1.1 目的	177
1.2 方法	178
2 声点の起源をめぐる研究史	178
2.1 研究史の概略	178
2.2 声点資料における『日本書紀』声点本の位置	179
2.3 声点の起源	180
3 内部徴証による『弘仁私記』序の検討	180
3.1 『弘仁私記』に関する研究史の概略	180
3.2 『弘仁私記』偽書説と反偽書説の論拠	181
3.3 「以丹点明軽重」	182
3.4 序の構成	183
3.5 万葉仮名の和訓と声点	184
3.6 葉子の変と序の作者	185
4 外部徴証による『弘仁私記』序の検討	186
4.1 外部徴証	186
4.2 『日本書紀』声点本の差声方式	186
4.3 岩崎本の声点	186
4.4 齊明紀童謡の声点	187
4.5 乾元本神代紀所引私記	187
4.6 「此声弘仁説」	188

4.7	万葉仮名原音声調	188
4.8	古事記声注	188
4.9	ヲコト点の起源	189
4.10	講書の作法	189
4.11	大学と博士家	189
4.12	鎌倉時代以降の『日本書紀』研究	191
4.13	関連他文献の声点	191
4.14	遣唐使・遣新羅使・遣勃海使と学問	191
4.15	角筆文献に見える声点	193
4.16	氏文の時代	193
4.17	声点と証拠	194
5	結論	194
6	おわりに	195
第2章 乾元本紀所引『日本紀私記』の万葉仮名		197
1	はじめに	197
2	研究史	198
3	仮名字母について	199
4	万葉仮名の用法の分析	200
4.1	歴史的仮名遣い	201
4.2	上代特殊仮名遣い	201
4.3	ヤ行のエ	202
4.4	踊り字	203
4.5	実字訓	203
4.6	濁音仮名	203
4.7	有韻尾字	203
4.8	訓仮名	204
4.9	その他	204
5	他文献の仮名との比較	205
6	おわりに	208
第3章 『日本書紀』古写本中の万葉仮名表記の和訓		209
1	はじめに	209
2	書紀古写本中にみえる万葉仮名表記の和訓	209
3	現存私記との比較	215
4	「養老」の注記をもつ和訓について	216
5	おわりに	219

(付)『日本書紀』古写本中の万葉仮名訓語彙索引	220
第4章 『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓	227
1 はじめに	227
1.1 目的	227
1.2 方法	227
2 『公望私記』研究史	229
2.1 『日本紀私記』	229
2.2 『公望私記』	229
2.3 『和名抄』序文	229
2.4 「日本紀私記云」と「日本紀云」	230
3 『日本紀私記』和訓の万葉仮名字母	231
3.1 『日本紀私記』の和訓	231
3.2 『和名抄』所引『公望私記』の万葉仮名訓一覧	232
4 『和名抄』の万葉仮名	232
4.1 源順の使用仮名字母	232
4.2 万葉仮名字母表	238
4.3 稀用仮名	239
4.4 凶書寮本『名義抄』所引『和名抄』の万葉仮名訓	240
5 濁音仮名	240
5.1 濁音仮名	240
5.2 「太」「豆」「度」の仮名	240
5.3 「遅」の仮名の清濁	246
6 和訓の類聚	247
6.1 源順の和訓の採録方針	247
6.2 『本草和名』和訓の採録状況	247
6.3 『楊氏漢語抄』と『弁色立成』	252
7 万葉仮名字母の継承と改変	252
7.1 万葉仮名字母の改変	252
7.2 『公望私記』の万葉仮名字母の復元	254
7.3 片仮名化と傍訓化	259
7.4 和訓の声点	259
8 おわりに	261
第5章 延喜『公望私記』の構造	262
1 はじめに	262
1.1 目的	262
1.2 方法	262

2 『公望私記』について	263
2.1 研究史	263
2.2 作者	263
2.3 名称	263
2.4 成立	264
2.5 伝本	264
2.6 形式	264
2.7 表記	264
2.8 影響	264
2.9 構造	264
3 『公望私記』の構造	266
3.1 『釈日本紀』所引「公望私記」	266
3.2 延喜『公望私記』の構造	268
3.3 関係資料における項目数	270
4 乾元本『日本書紀』所引『日本紀私記』	271
4.1 万葉仮名訓一覧	271
4.2 分析	278
5 日本語史資料としての『日本紀私記』万葉仮名訓	280
5.1 日本語学的検討	280
5.2 ヤ行のエ	280
6 おわりに	281
第6章 日本紀講書とアクセント	283
1 はじめに	283
2 日本紀講書の特色	285
2.1 日本紀講書の概略	285
2.2 日本紀講書の時代背景	286
3 日本紀学の勃興と継承	287
3.1 講書の継続性——「日本紀学」の継承	287
3.2 和訓の類聚	289
3.3 本草和名の声点	289
4 日本紀講書とアクセント	290
4.1 講書での言及——元慶「名実私記」	290
4.2 声点——古いアクセント型の保存	292
4.3 声点——移点による動揺	293
5 『日本書紀』声点本成立以前	298
5.1 『弘仁私記』序の「以丹点明軽重」	298

5.2 声点の起源と受容	298
5.3 声点とアクセントが示す古さ	299
6 おわりに	300
第Ⅲ部 平安時代京都アクセントに関する研究	
はしがき	305
第1章 和語声点資料の差声方式	309
1 はじめに	309
2 四声体系・六声体系における声点の注記位置	310
3 下降調と声点注記位置	311
4 六声体系における下降調を表す声点	315
5 おわりに	317
第2章 助詞「の」のアクセント	319
1 はじめに	319
2 具体例とその検討	320
I 平上上+の	321
II 平平上上+の	322
3 接続面で問題のある語	324
4 助詞「の」のアクセントの性格	326
5 おわりに	328
第3章 アクセント史研究における拍内下降	331
1 はじめに	331
1.1 目的	331
2 「下降」をめぐる術語の問題	331
2.1 術語	331
2.2 差声方式	332
3 平声軽点発見までの研究史	333
3.1 下降が記述されるまで	333
3.2 下降はいつから存在したか	333
4 平声軽点発見以後の研究史	333
4.1 アクセント体系の新たな再構	333
4.2 平声軽点の分布の解釈	334
4.3 上東型存否論争史	334
4.4 書紀原音声調と拍内下降	336
4.5 拍内下降を有する語一覧	337

5 京都方言アクセントの音韻論的解釈	338
5.1 研究史概観	338
5.2 平安時代末京都	338
6 おわりに	341
第4章 平声軽点の消滅過程	343
1 はじめに	343
2 研究史・研究方法	344
3 各資料の特徴と問題点	345
3.1 図書寮本『類聚名義抄』	345
3.2 岩崎本『日本書紀』	350
3.3 『金光明最勝王経音義』	351
3.4 半井家本『医心方』	352
3.5 (参考)『和名類聚抄』	354
4 考察	356
5 アクセント体系	358
6 おわりに	358
第5章 アクセント体系大変化の要因	361
1 はじめに	361
2 研究史	362
2.1 体系変化の時期	362
2.2 体系変化の要因	364
3 体系変化の要因について	366
3.1 助詞アクセント独立性の喪失過程	366
3.2 弁別の特徴「押さえ」の消滅	369
4 おわりに	370
第6章 『金光明最勝王経音義』所載「以呂波」のアクセント	372
1 はじめに	372
2 研究史	374
3 「以呂波」の復元	376
4 「以呂波」の借字	379
5 いろは歌のアクセント	382
5.1 差声方式と声点図	382
5.2 「以呂波」のアクセント	384
6 おわりに	388

第7章 いろは歌の作者について——いろは48字説の検討——	390
1 はじめに	390
2 研究史	391
2.1 大矢透(1918)まで	391
2.2 大矢透(1918)以後	391
2.3 小倉肇(2003)	392
3 ア行・ヤ行のエの区別に関わる研究史	394
4 いろは歌の問題点	395
4.1 「色」・「我が世」・「夢」・「酔」	396
4.2 「し」の清濁	396
4.3 「有為の奥山」	397
4.4 「とがなくてしす」	399
5 いろは歌の作者	401
5.1 源順の弟子	401
5.2 勸学会結衆	402
5.3 法華経詩の作者	402
5.4 幼学書の製作者	403
5.5 源為憲と関わりのあった人々	404
5.6 いろは歌の作者	407
6 おわりに	408
結 論	411
1 はじめに	411
2 アクセント史資料としての『日本書紀』声点本	411
2.1 第Ⅰ部の研究成果	411
2.2 第Ⅱ部の研究成果	414
2.3 第Ⅲ部の研究成果	416
3 課題と展望	419
4 おわりに	421
参考文献	422
あとがき	435
初出一覧	436